

平成21年5月28日

生誕100年記念 太宰治と美術—故郷と自画像 プレスリリース



画集を見る太宰治 三鷹 1947年頃

太宰治生誕100年を記念し、「太宰治と美術—故郷と自画像」展を開催します。

太宰治（1909–1948）の代表作『人間失格』では、主人公が漫画家であり、自画像や写真が重要なモチーフとなっていますが、太宰自身も中学時代から美術に関心が深く、同人誌などの表紙を自らデザインしたほか、ノートや教科書には自画像をはじめとする顔の落書きを繰り返し描いていました。また、晩年に友人の画家のアトリエで筆をとって描いた自画像とされる肖像画など、太宰自身が描いた絵画も残されています。

本展では、これらの太宰の手になる絵画やデザインを展示し、美術との関連という視点で太宰治の生涯と文学を展望します。また、太宰が親密に交流した阿部合成や小館善四郎といった青森市出身の画家たちの作品や太宰との交友を伝える資料を展示し、太宰の芸術を育んだ「故郷」である、大正末から昭和戦前にかけての青森の芸術環境と文化ネットワークを紹介します。

また、関連する太宰の小説の直筆原稿、書簡、初版本、初出雑誌など貴重な文学資料に加え、太宰の生きた時代の津軽の写真や資料等を展示し、生誕100年を期に、あらためて太宰治の全貌を紹介していきます。

展覧会概要

- ① 名 称 生誕 100 年記念 太宰治と美術—故郷と自画像
- ② 会 期 2009 年 7 月 11 日（土）～2009 年 9 月 6 日（日）
休館日：7 月 27 日（月）
開館時間：9:00-18:00（入館は 17:30 まで）
- ③ 会 場 青森県立美術館
- ④ 主 催 青森県立美術館
- ⑤ 共 催 青森県近代文学館
- ⑥ 助 成 芸術文化振興基金
- ⑦ 後 援 東奥日報社、陸奥新報社、デーリー東北新聞社、河北新報社、
毎日新聞青森支局、読売新聞青森支局、朝日新聞青森総局、
日本経済新聞社青森支局、共同通信社青森支局、時事通信社
青森支局、NHK 青森放送局、青森放送、青森テレビ、
青森朝日放送、青森ケーブルテレビ、八戸テレビ放送、エフ
エム青森、コミュニティーラジオ局 B e F M、F Mアップル
ウェーブ、エフエムアジュール
- ⑧ 入 場 料 大人 800(600)円 大高生 500(400)円 小中生 200(100)円
※ () 内は 20 名以上団体料金。常設展示もご覧になれます。

※同時期開催の県による太宰治関連イベント

(1) 青森県近代文学館「太宰治生誕100年特別展」

会 場：青森県近代文学館

会 期：2009年7月11日（土）－9月6日（日）

休館日：7月23日（木）、8月27日（木）

入館料：無料

※ 詳細は青森県近代文学館（tel. 017-739-2575）にお問い合わせ下さい。

(2) 太宰治生誕100年記念公演「津軽」

作・演出：長谷川孝治（青森県立美術館舞台芸術総監督）

公 演 日：2009年9月2日～9月6日 18:00開演

会 場：五所川原市金木町 津軽鉄道芦野公園駅特設会場

キャスト：主演：村田雄浩、川上麻衣子 他

主 催：青森県、太宰治生誕100年記念公演「津軽」実行委員会、(財)自治総合センター

※ 詳細は同実行委員会（tel.017-734-9207）までお問い合わせ下さい。

展示構成（予定）

※資料保護のため、文学資料等は一部複製展示となります。

①太宰治の青森～その芸術環境

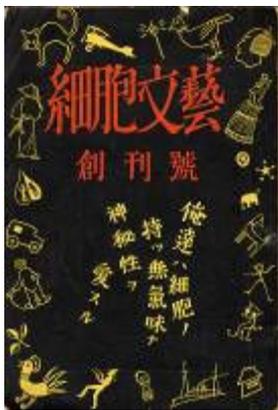
太宰治が通った当時の青森中学は数多くの画家・芸術家を輩出しています。一年先輩の鷹山宇一、同級生の阿部合成、後輩の小館善四郎、関野準一郎、根市良三、佐藤米次郎といった人々は、文学や演劇、美術などには幅広い関心を持ちながら、同人誌や版画誌を作るなどの活動を行い、画家への道を歩み始めました。また、東京から移ってきたばかりの今純三が若者を教え、棟方志功、松木満史らが合浦公園でスケッチをするなど、青森の芸術文化の胎動期ともいえる時代でした。

このコーナーでは、太宰の芸術的な素養を育んだ青森・津軽の町の姿と文化環境を当時の写真や資料で再現し、同時期に歩みをはじめた芸術家達の作品を紹介します。

②「画家」太宰治～自画像への関心

太宰治は東京美術学校に進んでいた兄圭治の影響もあり、中学時代のひととき、自ら編集する同人雑誌の表紙デザインやポスターをてがけるなど美術にも熱中し、美術と文学のどちらへ進むか迷っていたといいます。文学を選んだ後も、美術への深い関心を持ちつづけ、画家の友人も多く、彼らのアトリエで自ら絵筆をとることもありました。また、太宰の分身ともいえる「道化の華」「人間失格」の主人公、大庭葉蔵が画学生・漫画家として描かれるなど、太宰の小説には画家や美術作品が重要なモチーフとして数多く登場します。

このコーナーでは太宰自身の描いた自画像とされる油彩画などの絵画や、表紙をデザインした中学・高校時代の同人誌、自画像のような落書きが描かれた学生時代のノートなどを中心に、太宰と美術に関連する資料を展示します。



1



2



3



4

- 1 「細胞文芸」創刊号 1928年5月 青森県近代文学館蔵
弘前高校時代の同人雑誌。太宰が編集とともに、表紙のデザインもおこなった。
- 2 太宰治 『自画像』 1947年頃 油彩 個人蔵
太宰が友人の画家桜井浜江のアトリエで描いた自画像とされる肖像画
- 3 太宰治 『風景』 1940年頃 油彩 個人蔵
太宰が友人の画家鱒崎潤のアトリエで描いた。
- 4 桜井浜江 『人物』 1948年 キャンバス・油彩 三鷹市美術ギャラリー蔵
桜井浜江(山形市出身、1908-2007)は太宰の友人で、小説『饗応夫人』のモデルといわれる。太宰が戦後三鷹の彼女のアトリエで画材をかりて描いた油彩画が何点か残されている。

③太宰治の生涯と文学

パネルと年譜、初版本、自筆原稿、資料により太宰の生涯と文学の概要をわかりやすく紹介します

④「晩年」の時代～東京の青森ネットワーク（小館善四郎、根市良三、菊谷栄）

太宰治は、東京に出た後も青森時代からの友人達と親しく交遊し、芸術について語り合い、刺激を与えあっていました。この時代に最初の作品集『晩年』が書かれています。その前衛的な手法とみずみずしい抒情には若き日にこの仲間達とかがりあった新しい芸術の息吹が反映しています。東京で親密な交流のあった親戚の画家小館善四郎（1914-2003）をはじめ、根市良三（1914-1948）、菊谷栄（1902-1937）といった当時交友のあった同郷の若い芸術家達の作品や手紙・原稿などの資料を中心に、太宰の文学と彼らの交流について紹介します。



1



2



3



4

- 1 小館善四郎 『おべんきょう』 1945-46年 キャンバス・油彩
太宰の姉、京が小館の兄貞一のもとに嫁いでいたため、小館は太宰の義弟にあたる。この作品は小館京の娘（太宰と小館の姪にあたる）をモデルにえがいたもの
- 2 太宰治 小館善四郎あて書簡1936年8月22日付
絵はがきを同封し、その絵について批評。芸術家の心構えを説く。
- 3 太宰治 小館京あて絵葉書 1934年8月14日 三島から
- 4 根市良三 私家本「思ひ出」装画 1933年 多色木版画 県立郷土館蔵
根市良三の兄は太宰の中学時代の同級生で、根市は小館善四郎の青森中学の同級生であった。1948年夭折したが、木版画に優れた作品を残している。1933年上京し、太宰との交流もあった。太宰は同人誌『海豹』に掲載された自作の『思ひ出』を切り取り、手作りの本を数冊作っていたが、根市に版画でその表紙を依頼している。

⑤太宰治と阿部合成

太宰治と青森中学の同級生で、同人誌を共に作るなど当時の文章のライバルでもあった画家の阿部合成（1910-1972）は、昭和12年頃東京で再会します。浪岡の名家の息子で、父は青森市長もつとめ太宰と出自の環境も似ていた阿部合成は、再会后、親密な友情を結ぶに至り、太宰のいくつかの作品の登場人物には彼の面影が指摘されています。

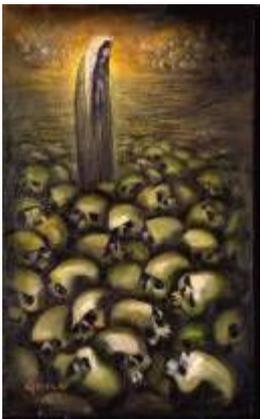
また阿部は、太宰の「千代女」「風のたより」などの著書の装幀を行い、太宰の没後は、金木町芦野公園の太宰治碑を制作しています。そして、聖書への関心は両者に共通するテーマでもあり、太宰の没後、阿部は数多くのキリスト教的な主題の作品を制作するようになります。本コーナーでは阿部の作品や装幀本、関連資料を展示すると共に、二人の交友を紹介します。



1



2



3



4



5

- 1 太宰治『千代女』 1941年8月刊 装幀阿部合成
- 2 阿部合成応召送別会にて 1941年夏 右より山岸外史、太宰、阿部、赤坂友男
- 3 阿部合成「声なき人々の群れ」1966年 板・油彩
- 4 阿部合成 太宰治碑 1965年 五所川原市金木町芦野公園
- 5 阿部合成「太宰治碑のためのデザイン素描」1965年頃 紙・鉛筆（スケッチブック）

⑥太宰治と写真

太宰治を写した写真は数多く残っており、自分の写真をテーマとした「小さいアルバム」という小説や、写真を重要なモチーフとして用いた「人間失格」など、写真、とくに自分自身が被写体となることについて強い関心をもっていました。また、晩年、三鷹時代での太宰には、バー「ルパン」での林忠彦の写真や、田村茂が太宰の一日を撮影した一連の写真などが残されています。本コーナーではこれらプロの写真家がとった太宰の肖像に加え、様々な折に撮影されたポートレートを紹介することで写真と太宰の関係を探ります。



1



2



3

1 太宰治 5歳頃

2 弘前高校時代の太宰治。藤田本太郎撮影。

3 1947年冬 上野の浮浪児たちと。『美男子と煙草』に描かれている写真

⑦家族の肖像～太宰の見た家族、家族の見た太宰

太宰治は作品の中で妻や子供たち、兄たちなど家族のことを繰り返し書いています。「家族」は太宰の文学の重要なテーマでもあります。また、太宰の没後、家族達は、太宰の遺した作品や資料を整理・保存し、後世に伝えるとともに、夫人の著作「回想の太宰治」をはじめ、すぐれた回想を著しています。このコーナーでは、家族とともに撮影された太宰の写真、太宰が家族をテーマにした小説原稿、夫人がまとめた太宰の回想・資料などを紹介します。



1



2



3

1 前列左から母たね、太宰、叔母きゑ 1911年頃

2 太宰、美知子夫人、長女園子。1941年

3 長女園子を抱く太宰。1941年

⑧太宰治と棟方志功(棟方志功展示室)

太宰治と棟方志功は直接の交友はありませんでしたが、太宰は青森中学時代、下宿先の近所にあった花屋に展示されていた無名時代の棟方の油絵を購入したことや、昭和14年の東奥日報の在京芸術家座談会で出会ったことなどを書き残しており、棟方も太宰の思い出をエッセイに書いています。

彼ら二人には、青森出身の文化人、文学者や芸術家はもとより、保田与重郎をはじめとする日本浪漫派の文学者など共通する友人が多くおり、棟方は彼らの著書の装幀を行ったり、彼らの詩などを題材にした作品を数多く制作しています。文学、美術の両ジャンルにおいて近代日本を代表するこの二人の青森県出身の芸術家は、同じ時期に青森市に過ごし、東京に出たのちも青森とのつながりを持ちながら、故郷を題材にした作品を制作しつづけていたことでも共通しています。

このコーナーでは、太宰の青森中学時代と重なる時期の棟方の油彩作品、日本浪漫派の著書の装幀本、太宰とゆかりのある人々を描いた作品など、太宰と関連する視点で棟方志功の作品を構成し、展示します。

関連事業

- (1) 青森県近代文学館 「太宰治生誕100年特別展」 第一回文学講座
朗読とトーク：「私と太宰ー朗読『魚服記』ー」 山根基世（「ことばの杜」代表）
講演：「太宰治と津軽」 三浦雅士（文芸評論家）
場所：青森県立美術館シアター
日時：2009年7月26日（日） 13:00-15:30
主催：青森県近代文学館、共催：青森県立美術館
聴講料：無料

※事前申し込みが必要です。

◇申し込み方法・お問い合わせ先◇

ハガキ、ファックス、電話（住所・氏名・電話番号明記）あるいは青森県近代文学館ホームページ上から下記までお申し込み下さい。直接近代文学館へ来館してお申し込みも可能です。なお、定員（220名）になり次第締切らせていただきます。

青森県近代文学館 〒030-0184 青森市荒川字藤戸1 1 9 - 7
TEL 017-739-2575 FAX 017-739-8353
<http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/museum/>

(2) 記念講演会

- 講演：「太宰治：自画像の文学」 安藤宏（東京大学准教授）
朗読：「太宰治『津軽』より」 船水もも（弘前高校三年生）
場所：青森県立美術館シアター（定員220名・当日先着順）
日時：2009年7月12日（日） 13:00-15:30
主催：青森県立美術館、共催：青森県近代文学館
（本展チケットが必要です。事前申し込み不要。）

(3) ドラマリーディング

①「津軽/ことば」

構成・演出：長谷川孝治（青森県立美術館舞台芸術総監督）
会場：展示室H（本展チケットが必要です）
日時：2009年7月18日（土）・7月25日（土） 15:00ー（30分程度）

②「畜犬談」「おしゃれ童子」

構成・演出：長谷川孝治（青森県立美術館舞台芸術総監督）
出演：村田雄浩・川上麻衣子 他
会場：県立美術館シアター（定員200名・当日先着順）
日時：8月16日（日） 14:00ー（60分程度）
（本展チケットが必要です）

(4) ギャラリー・トーク

担当学芸員が展示を案内します。
会期中毎土・日曜日 11:00-12:00
（本展チケットが必要です）

(5) アート入門 エキシビション・アイズ「太宰治と美術」

講師：青森県立美術館学芸員 池田 亨
日時：2009年7月19日（日） 13:30-15:00
場所：県立美術館シアター（定員220名・当日先着順）
聴講料：無料